

不登校の早期対応に関する校内研修（中学校）

1 研修のねらい

- ・不登校による生徒の問題について、不登校になった原因等を分析し、関係機関との連携を図りながら組織的な対応を行うことが、早期解決につながることを理解を深める。
- ・教職員、SCやSSWの役割や位置付け等、「チーム学校」として組織的取組の在り方について理解を深める。

2 参加者 教職員、SC、SSW

3 事前準備

(1) 配付物

ア 参加者 資料、「問題分析シート」「スクールカウンセラーの効果的活用 Q&A」

イ グループ 「問題分析シート」拡大コピー、マジック

(2) グループ（グループ編成は、年齢や経験年数等を考慮）4～6人

4 活動の流れ

段階	活動内容	留意点	時間
導入	○研修の流れを確認する。	・本資料を配付し、研修の流れについて説明する。	5分
展開	○A子が抱える問題を把握する。 ・資料を配付し、A子に関わる問題についてグループで感想を話し合う。	・資料を配付する。 ・A子の変化から、「問題点」に気付かせる。	5分
	○担任として、どのように対応したらよいか考える。 ・自分の学校を想定し、誰に相談するか、どのような体制で対応していくのか考える。	・個人で対応せずに、組織的に対応していくことを確認する。	5分
	○A子が抱える問題に対して、学校として「どのような対応をすべきか」について考える。 【活動の手順】 ① 各自が、「問題分析シート」に従って、問題の要因、支援方法等について記入する。 ② グループで、拡大コピーに自分の考えを出しながら、グループの考えをまとめる。	・「問題分析シート」を配付し、演習の方法について説明をする。 ・活動により、個人よりもグループで対応することの意義について理解を図る。	30分
	○グループでまとめたことを、全体の場や各グループ同上で発表する。	・グループによって問題の受け止め方や対応の仕方に違いがあること、多様な方法が考えられることに気付かせる。	15分
終末	○SCが、事例で配慮すべきポイントを助言する。	・スクールカウンセラーは、別紙を参考に助言する。	10分
	○活動の振り返りをする。 ・研修で学んだことを、今後の生かし方について考える。	・生徒指導担当は別紙を基に学校組織と絡めてまとめる。	5分
	○生徒指導担当がまとめる	※学校組織図等を示す。	

※ 支援の役割等を決定するにあたっては「SSWアセスメントシート」を使用する。

※ 別紙 【まとめや助言（例）】

生徒指導担当によるまとめ（例）

本事例のように、家族を支援する人がなく、経済状態に困窮していたり保護者の教育力が低かったりする家庭状況の中で、学力不振や社会性の未熟、いじめを要因とする子供の不登校が年々増えてきている。このように、複合的な要因の基に不登校が継続している場合、学級担任や学校だけで支援していくことは難しい。市町教育委員会をはじめ、SC、SSW、適応教室職員、児童相談所職員等との連携を図りながら、チーム学校としての「具体的な支援」を講じていくことが求められる。

子供に不登校傾向が見られた場合、学級担任は、生徒指導担当を始め、養護教諭、管理職に、すぐに報告・相談し、組織的に対応していくことが重要である。そして、校内関係教職員、SC、SSWを交えたケース会議を開き、子供の実態や家庭の状況変化に応じた支援の仕方について方向性を探り、組織的に支援を行っていくことが求められる。早期発見、早期対応が、未然防止や早期解決につながる。

なお、学校とSCやSSWとの連携が円滑に図れるよう、各立場や役割について理解しておく必要がある。

SCは、臨床心理の立場から、子供や保護者へのカウンセリングや相談を行い、子供の様子や支援につながる見解を学校に伝える。

一方、SSWについては、社会福祉の立場から、家庭や地域の状況を基にした支援の可能性や方向性について学校職員に伝える。

学校はこうした情報を参考にしながら子供への指導・支援を行う。

スクールカウンセラーによる助言（例）

A子の事例の場合、具体的な支援については、次のようなことが考えられる。

A子の実態

A子は、授業についていけないことなどから、学習意欲が低下している。また、他とのコミュニケーションが苦手で、自信を持ってないでいる。家庭の教育力も低く、家庭からの働き掛けや支援を期待することは難しい。併せて、兄の不登校の様子を見ていることから、妹とともに不登校に陥りやすい環境にある。

学習支援

保護者の理解を得た上で、医療機関や関係機関において発達検査を受けることを進め、A子の特性に応じた支援を行っていくことが考えられる。

「A子にも分かる授業」「A子の学力や学習状況等に応じた学習環境の整備」に努め、「学習が分かる、できる、楽しい」といった「学ぶことの楽しさや充実感」を味わわせていく。また、家庭学習においては、A子の学力や学習姿勢に応じた課題を与えていく。

人間関係づくりへの支援

自分の思いを表現する機会を、意図的に設けることが必要である。

担任を始め、SCや養護教諭等が、カウンセリングや日常会話の中で、心の中の思いを表現させていくことから始める。A子が安心して自分の思いを表現することができるようになってきたところで、他の子供を交えた会話に入れていくなど、段階的な支援を行う。中学校においては、部活動顧問が全ての子供が活躍できる場や、人間関係を育みながら部活動の楽しさを味わえるような取組をしていく。一方で、A子への「いじめ」の有無についても調査し、他の子供との関係や距離感を把握しながら、集団に属していけるよう配慮する。

家庭への働き掛け

保護者との面談を定期的に行い、学校と家庭が共通理解を図りながら支援を進めていくことが重要である。学校や家庭での様子について情報を交換するとともに、家族で過ごす時間を確保することや、保護者の家庭学習への関わりについて支援を依頼する。経済的な面においては、保護者の必要に応じて、就学援助等の社会保障支援について紹介する。面談の際は、生徒指導担当を始め、学級担任、管理職、必要に応じて養護教諭が入るなど、組織的に対応する。

結びに

不登校は経過が長く、成果が見えにくいため、「効果がない」というあきらめの気持ちが起こりやすいものである。しかし、保護者との信頼関係を築き、関係機関との連携を取りながら、子供の様子や経過に合わせて支援を継続していくことが大切である。

資料（中学生）

1 本人及び家族の状況

(1) A子について

- ・ 中学1年生女子
- ・ おとなしい性格で、自分から友達に話し掛けることがない。人と関わりが合うことが苦手。
- ・ 6月までは毎日登校していた。2学期は、初日は登校したが、遅刻が増え、週1～3日程度の欠席が見られるようになってきた。
- ・ 学力は、各教科5～20点(50点満点)で、自分から発表することはほとんどない。1学期期末テストの数学と英語は、ほとんど点数を取ることができなかった。
- ・ 授業中、集中力が切れてぼうっとすることがある。
- ・ 読書が好きで、休み時間に本を読んでいる姿がよく見られる。
- ・ 部活動はバレーボール部に所属。夏休みは、度々欠席が見られた。バレーボールは、中学から始めた。
- ・ 係活動や委員会活動の仕事は、真面目に取り組む。

(2) A子の家庭状況

- ・ 母親、兄（専門学校生1年）、妹（小学校2年）の4人家族
- ・ 母親は昼から夜に掛けて、仕事をしている。夜、9時過ぎに帰宅。
- ・ 父親や親戚からの経済的な支援はない。
- ・ 母親は、A子が言うことを聞かないことがあり、困っている。
- ・ 兄は小学校時代、不登校になっていた時期があった。
- ・ 小学校2年生の妹が、今年になって登校を渋るようになり、遅刻が目立つようになってきた。
- ・ 近所付き合いがなく、子供たちは家族以外との関係はほとんどない。

2 その他の状況

- ・ バレーボール部は、市内でも強いチームである。小学校からバレーボールをやっている子供が、主に活躍をしている。1年生部員は11人。部活には小学校時代に比較的仲の良かった友達に誘われて入った。
- ・ 小学校3年生の時に、学級担任から勧められ、発達検査を受けている。これまで、特別支援学級に勧められたことはない。
- ・ 小学校の頃から腹痛を理由に欠席することが度々あった。高学年になると登校班からも後れて登校するようになった。
- ・ 5年生の頃、保護者から「友達が少ない。いじめられていることはないか。」との相談があった。学級担任は、学級での聞き取り調査やアンケート調査を行ったが、いじめの事実を確認できなかった。6年生の頃から、しだいにクラスの友達となじめなくなってきた。
- ・ 中学校には3つの小学校から集まってきている。どの小学校も2学級程度の中規模校。小学校は仲の良い子供と同じ学級になるように学級編成を行い、中学校ではそれを参考にしながら学級編成をした。

児童生徒名	性別	学年・学級	担任・担当者名	欠席日数 (年間)	欠席の理由
				口 月 日 ~ 口 月 日 (口)	

考えられる要因

手順②
不登校につながった様々な要因を、複数洗い出す。家庭環境、人間関係、性格、特徴等

考えられる誘因

手順③
不登校に至った直接的な原因を見出し、記す。

手順①
問題
現在、解決すべき状況、問題について記す。

具体的問題

手順④
解決するにあたっての様々な問題や課題を明確にして記す。

手順⑤
④をさらに具体化し、解決すべき問題・課題を明確にする。

手順⑥
⑤を踏まえて、課題解決のために、子供や家庭に対する支援や方策を書き出す

チーム支援

手順⑦
組織的な対応として、学校が行う支援や各教職員の役割について記す。

家庭・関係機関との連携

手順⑧
家庭や関係機関と連携することを記す。
・どこが機関か。
・どのような連携を依頼するのか。

SC手持ち資料

児童生徒名	性別	学年・学級	担任・担当者名	欠席日数（年間）	欠席の理由
A子	女	1年1組	あすなる 太郎	11日【8月26日～9月12日】（28日）	腹痛、頭痛

考えられる要因

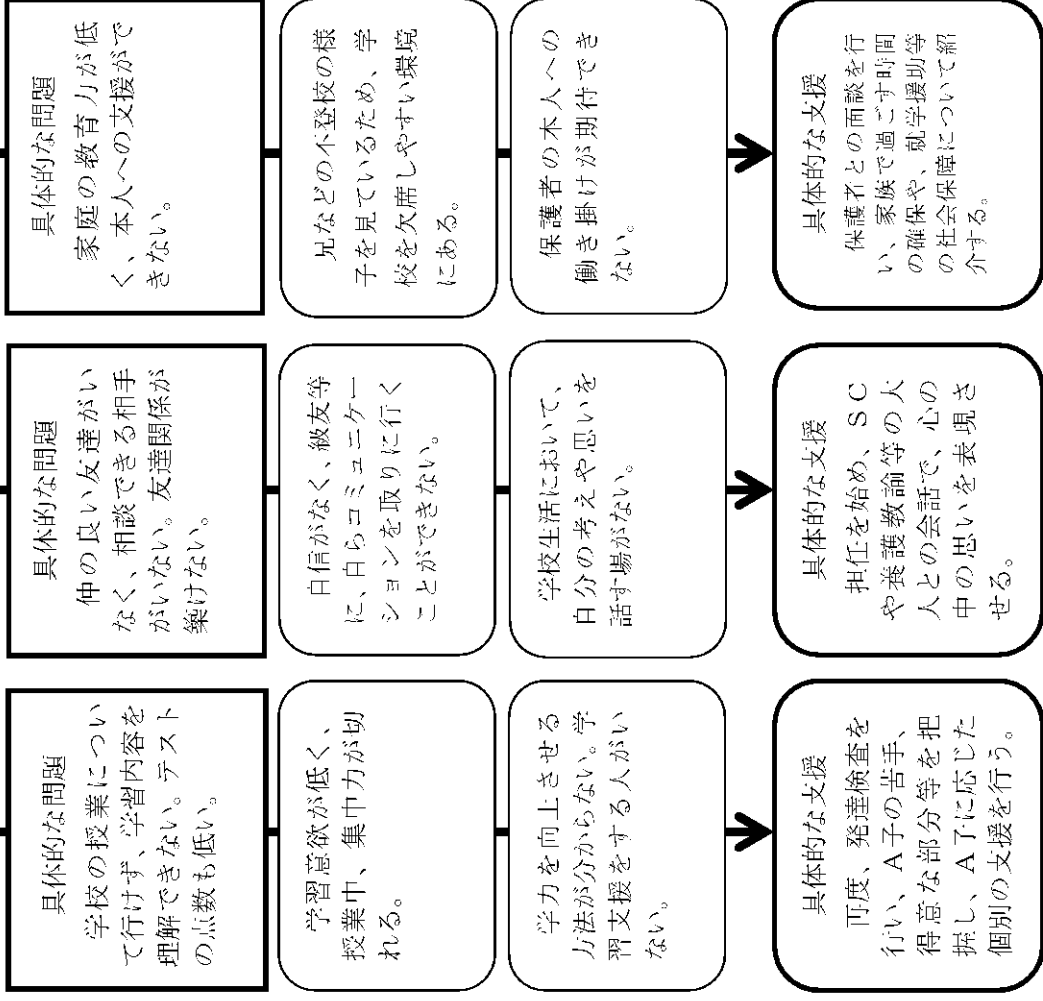
- ・ 学力不振で、学習内容が身に付いていない。
- ・ 自分の思っていることが言えないなど、他とのコミュニケーションを取ることが苦手。
- ・ 自分に自信が持てない。

考えられる誘因

- ・ 期末テストで、点数が取れなかったことで、学習への意欲がもっとそう低下した。
- ・ 部活動で、仲の良かった友達の意識が自分から離れていってしまっていると感じ始めた。
- ・ 学校が楽しくなくなってきた。

問題

2学期から、不登校になりつつある



チーム支援

- ・ 級外職員や支援員、養護教諭等が、学習支援を行う。
- ・ 生徒指導主事を中心にケース会議を定期的開催し、役割と支援の方向性を明確にする。
- ・ 部活動顧問は、全ての子供が活躍できる場や人間関係を育みながら部活動の楽しさを味わえるような取組をしていく。

家庭・関係機関との連携

- ・ 学級担任、管理職、生徒指導主任、必要に応じて養護教諭等と交えた保護者面談を行う。
- ・ 学校教職員、出身小学校教職員、SC、SSW、適応教室職員、市生徒指導担当等が会し、ケース会議を開く。
- ・ SCやSSWとの連携を密に行い、学校の支援の在り方についてしながら進める。

児童生徒名	性別	学年・学級	担任・担当者名	欠席日数 (年間)	欠席の理由

